

# 東京と能登の「二拠点生活」を謳歌<sup>おうか</sup>。 片道560kmを車で往復、月に一度の「能登休み」

## 長屋茶房天真庵 野村栄一さん・喜代美さん夫婦 東京都墨田区→羽咋郡志賀町

東京スカイツリーを見上げる墨田区文花1丁目にあるコーヒーと蕎麦の店「長屋茶房天真庵」には、通常の定休日のほかに「能登休み」という休業日がある。店を営むのは東京と能登の「二拠点生活（デュアルライフ）」を実践している野村栄一さん（65・喜代美さん（58）夫妻だ。二人は今から3年前の2019年（平成31）1月に志賀町笹波の空き家を購入し、トイレなどをリフォームしたあと、その年（令和元年）の9月から、月に1度、10日間ほどの日程で「能登休み」を作り、自家用車でこの住まいにやってくる生活を続けている。

蕎麦打ちの弟子を訪ねたことが能登移住のきっかけ

東京でカフェの営業に加えて、さまざまな教室や演奏会の開催などで忙しい日々を送っていた野村さん夫妻は、いつしか田舎での休暇を考えるようになった。候補地を探していた折、栄一さんがかつて蕎麦打ちを指導した男性が移り住んだ能登へ行く機会を得る。その男性は「能登」36号で紹介した茶房「梅茶翁」の山城誠次さんで、二人は何度か山城さんを訪ねて足を運ぶうちに、すっかり能登が気に入り、住まい探しを始めた。空き家バンクで探した2軒のうちの1軒に一目ぼれし、購入を決めた。

途中、車中泊して能登へ。食事や温泉を楽しみながら

二人の「能登休み」は、東京から能登へ自家用車で移動する片道560kmの「道

中」から始まる。

東京を出発するのは日曜日の営業を終えた午後6時から7時頃。関越道から上信越道に入り、午後11時頃、長野IC手前の松代PA（長野市）あたりで駐車して車中泊。翌朝6時から7時頃に出発して上信越道の新井PA（新潟県妙高市）へ。ここはスマートインターチェンジでもあり、高速をいったん出て、「道の駅あらい」に入ってから近くの「すき家」で和定食を取るのをお決まりのコース。

朝食後、上信越から北陸道に入り、小矢部JCTで能越道へ。昼食ポイントの氷見では必ず回転寿司を堪能する。石川に入ってから和倉温泉の総湯が志賀町の道の駅（アクアパークシ・オン）で温泉につかり、夕方、志賀町笹波の自宅に到

着する。「東京を出てから能登まで旅行感覚で楽しみながらやってくるんです」と笑う喜代美さん。二人はもともと旅行好きで、よく愛犬を連れて車で日本全国を旅行したという。

梅の収穫、田植え、稲刈り…能登時間を満喫する二人

能登ではのんびり、穏やかな時間を過ごす二人。時には本を読み、畑仕事をし、ご近所さんとの付き合いも楽しむ。能登町の山城さんを訪ねて、梅の収穫を手伝い、去年は初めて田植えと稲刈りも体験した。

こうして「能登休み」を過ごし、充電を済ませた二人は翌週の木曜日朝、東京へ向けて出発する。家を出て、まず七尾



能登へ来てから珠洲の珪藻土コンロと大野長一郎さんの炭に出会い、それを使ってコーヒー豆を焙煎することを始めた栄一さん。撮影日は風が強く、能登に初雪がちらつく天候だったが「いい感じで焙煎できるんですよ」と海岸で焙煎してくれた



能登へ来てから畑仕事も始めた栄一さん。蕎麦の薬味にするねぎみ大根（辛味大根）を自然栽培している



能登町の茶房「梅茶翁」を営む山城誠次さんの田んぼで稲刈りを手伝う野村夫妻。稲刈りのあとは皆で食事をする



野村さん夫妻の愛犬だったチワワの元氣くん



月に一度、東京と能登を往復する自家用車。車体にあるマークはかつての愛犬「元氣くん」（チワワ）の足型。二人は愛犬を連れて車で全国各地を旅行していた

市中島町の「藤瀬霊水」に寄る。店でコーヒーや蕎麦つゆに使う水をタンクに汲む。次に能登島の飲食店で遅い朝食を取り、和倉の総湯に入ってから、一路東京へ。その日の夜には墨田区の店舗兼住居へ帰り着く。

焙煎したばかりの豆でコーヒーを淹れる栄一さん。「縄文ドリポット」と名付けた陶器のドリッパーと急須（ポット）は天真庵オリジナル。豆は最高級の手摘みのブラジルとコロンビアをベースにした「長屋ブランド」すぼブラジル」と命名。「甘みと苦味、いろんな雑味が見事に調和していて、キレと後味の良さが特徴」（栄一さん）



月に10日ほどの「能登休み」を満喫している野村栄一さん・喜代美さん夫妻。偶然にも喜代美さんの父方の祖母が旧富来町（現在は志賀町）出身だったことが最近分かった。「能登の生まれということは聞いていたのですが、志賀町ということは知りませんでした。これも縁ですかね」と話す喜代美さん。





いつも笑顔が絶えない野村さん夫妻

IT会社の経営と「天真庵」という2本立てで突っ走ってきた二人。その人的ネットワークは多岐にわたり、趣味や関心の赴く先は、美術、音楽、建築、木工、陶芸、煎茶道から味噌作り・梅干し作り等々に至るまで、多種多彩だ。

能登の家には、「寒山拾得」を題材にした彩墨画で知られる知人の日本画家・南條観山氏の作品のほか、栄一さんがこれまで収集した美術品が展示されている。栄一さんはこれを「寒山拾得美術館」と名付けた。

「何年先になるか分からないけど、将来は能登へ完全移住、永住することを考えています」と話す二人。しばらくは二拠点生活を謳歌する日々が続く。



シリーズ 移住・定住 25

長屋茶房天真庵

東京都墨田区文花1-6-5  
☎ 090-2673-5217  
[営] 12:00 ~ 18:00 (土日は~ 16:00)  
[休] 水曜・木曜と「能登休み」(HPで確認)  
【主な蕎麦メニュー】ざるそば(850円)、とりそば(1,050円)、岩のりそば(同)、ガレット(850円)  
<http://tenshinan.jp>



野村さん宅の玄関

記事下広告

IT会社を設立した野村さん夫妻。ギャラリイも開き、多忙の日々を

1956年に北九州市で生まれた栄一さんは、立命館大学の学長や総長などを務めた法学者・末川博(1892-1977)に憧れて同大へ進学する。入学してまもなく、その末川最後の講演に接し、感銘を受けた直後、たまたま入った珈琲店「からふね屋」で口にしたモカに魅せられ、そのままその店に弟子入りしたのがコーヒーとの出会いだった。「忙しい店で、店がどんどん増えていき結局、大学にいた間に6店舗を任せられるほどした」(栄一さん)。

大学時代の終盤、栄一さんは同郷の一つ後輩で、かつて家族ぐるみの付き合いをしていた孫正義さん(現ソフトバンクグループ(株)会長兼社長)と再会する機会を得、孫さんが東京で起業したばかりの日本ソフトバンクに入社する。1982年(昭和57年)のことだった。しかし、1年半後、孫さんが体調を崩して一時会社を退いたのを機に栄一さんも辞める。ほどなくしてコンピューター関係の会社から誘われ、経営を任せられた栄一さん。そこで喜代美さんと出会うことになる。そして1986年(昭和61年)、二人はコンピューターの業務用ソフトの導入設計や指導を行うコンサルト会社を立ち上げる。世はまさに企業のコンピューター

導入時代で、二人の日々は多忙を極めた。担当した会社(顧客)は喜代美さんだけで約1800社にも上ったという。

会社設立から10年後の1996年(平成8年)、二人は本業の傍ら、「直感が働いて」(栄一さん)と、池袋の自宅の一角で「ギャラリイ天真庵」を開き、さらに11年後の2007年(平成19年)4月、現在の空き店舗に移り、「押上天真庵」(長屋茶房天真庵)と改名してコーヒーと蕎麦の店を始めた。

大学時代の経験をもとにコーヒーに関してはプロの腕前の栄一さん。蕎麦はギャラリイをやっていた頃、蕎麦打ちの名人高橋邦弘さんの道場と自宅を設計した知り合いの建築家に「野村さん、ギャラリイをやっているのなら蕎麦を打てた方がいいよ」と知らぬ間に話をまとめられ、栄一さんは広島の高橋さんのもとで4日間、みっちり蕎麦打ちを教わってきた。「何だか勝手に蕎麦修業に行かされた感じでしたけど」と、飄々と語る栄一さんだが、打つ蕎麦は本格的でファンも多い。

**能登の家を「寒山拾得美術館」と命名。「将来的には能登に永住する予定です」**

長屋茶房天真庵



野村さん夫妻が営む東京の「長屋茶房天真庵」。戦後、建築事務所として建てられ、野村さんが借りるまで25年間、空き家だった

店で蕎麦を挽く栄一さん=東京・墨田区の「長屋茶房天真庵」

日本画家・南條観山氏の作品のほか、栄一さんが収集した漆器や陶磁器、掛け軸、茶道具、火鉢、韓国の箏笛などが展示され、さながら「小さな美術館」